

序

——書かれた言葉を読む

松本和也

書かれた言葉を読む。

文学作品を読むこと、そして、文学研究と称される営みの、主な作業とは、まずこのことに尽きると思われるのだけれど、そこにはいくつもの条件・課題があり、思いのほか難しい。

しかも、それは読みの精度や歴史的妥当性、資料的根拠の有無、などといった議論以前に、「書かれた言葉を読む」ということそれ自体が難しい。

たとえば、「書かれた言葉」は何語なのか、地域や世代の特性はどの程度織りこまれているのか、言葉の来歴や文化的背景、単語や言い回しレベルでの含意など、気にすべきポイントは、いくらでも数えあげられる。

このように考えてみると、不特定多数の読者に向けて書かれた近代小説が、読者に読まれるということ自体が、何かしら特別なイベントのようにすら思われてくる。

ここで、言葉を介した伝達―理解の難しさが寓話のように書かれた、谷崎由依「国際友誼」から、次の一節を引いてみたい。

言葉が通じるというのは、どういうことなんだろう。男子学生はなすすべもなく、そんなことをあのころ思い、いまままた思っている。あんなにたくさん交わした言葉のあとで、どれひとつとして通じなかった。どれもこれもが日本語として、確かに意味はわかるのに、確かに自分にぶつかるくせに意味をすり抜け逃げていく。元恋人とのそうした会話は、キャッチボールというよりもドッジボールのようだった。

――わたしはずっと、遠くから、あなたに助けを求めている。

そう言った彼女のそのあなたとは、ほんとうは誰だったんだろう。⁽¹⁾

ここで物語上の文脈は措くが、男子学生が元恋人との会話を振り返った場面である。男子学生の立場からすると、言葉は紡がれ、それぞれの意味は理解できた、それでも残ったのは「言葉が通じなかった」という実感なのであった。もつといえ、一単語の指示内容すら、時間をかけても掴めずにいる。しかもこれは、同一の日本語間で起きている事態である。

ことほどさように、言葉による伝達―理解が難しいならば、そこに、異なる複数の言語を前提とした翻訳という営みが関わった場合の困難は、想像にあまりある。それでも／それゆえに、本書の各論が照準をあわせるのは、さまざまな意味での文学における翻訳である。その際、各論をゆるやかにつなぐキーワードが、本書のサブタイトルに掲げた、「流通・受容・領有」である。

ごく一般的に考えれば、翻訳によって文学作品の流通圏は拡張され、読者は増える。逆にいえば、読者（をはじめとした何かしら）のニーズがある時に、翻訳は企画―実現される。ただし、ここでいうニーズが自然発生的なことは少なく、二つの言語圏のいずれかに、何かしらのもくろみがある場合がほとんどである。異文化理解といえは聞こえはいいが、文化的先進国への憧憬から植民地支配や戦時下における敵国研究まで、その動機はさまざまである。また、一応は原文と訳文との等価性が原則だとされる翻訳を通じて、逐語的な訳文から新たな創作に近い訳文まで多様なバリエーションが生みだされ、そこに、企画者・翻訳者・読者の思惑が意識的／無意識的に織りこまれていく。表現者の動機を起点とする芸術一般とは異なり、翻訳が「あらかじめ「読者」他者の目」を想定した表現行為⁽²⁾である以上、これは当然の帰結ともいえる。逆にいえば、翻訳が生みだす何かしらの余剰に光を当てることで、当の翻訳はもとより、その周辺の機制や欲望を明るみに出すこともできるだろう。

本書に寄せられた六本の研究論文では、翻訳というかたちをとった文学を研究対象として設定し、翻訳をめぐるさまざまな契機（文学者・翻訳者、出版社・企画、書籍・雑誌など）からアプローチを試みた。これらの論文は、それぞれに異なる時代・地域・テーマを視界に収めながら、翻訳としての文学の係争的

な局面を、重なりとズレをもって描きだすだろう。

【注】

- (1) 谷崎由依「国際友誼」(『鏡のなかのアジア』集英社、二〇二二)、一三二頁。
(2) 鴻巣友季子『翻訳ってなんだろう? あの名作を訳してみる』(筑摩書房、二〇一八)、一五頁。